奇說排悶録

吉田屋

春

六

へ13
3143
6

3143
6

吉田屋

春

奇説排門録巻之六

琦行之部

目録

龔　翊
張　復
蘇門三賢
劉攽平
韓　壻
張　二
亞　孺

趙遼
安成乞
徐妙錦
萬義顓
沈雲英
賣腐人女
盆都人妾

合十四種

吉田屋

奇説排門録巻之六

琦行之部

龔翊

龔翊字ハ大章。崑山地名の人ニして金陵地名ニ住せり。年十七ニして金川門の卒となる。永楽帝永楽ハ明の年号帝を太宗の時ニて。靖難前ヨりの兵至れり時王穂将の名并李景隆将の名門を開き出迎へ降参せ。翊拒ぐニ力なく。声をあげて大ニ哭して。其場を立退き。故郷ニ還りて諸生ニ教授するを業とす。貧ニ安んじて学を好める人ニ。宣徳年号の比周忱其地の巡撫にて。翊を薦仕官せよんと云ふる時翊答て曰。翊今仕へんか。義ニ於て妨あり。然ル共若仕へざる。先年城門の慟哭の偽ニ成ん事を恐ると云て。辭して仕へず。田三十畝ありて。自耕して食ひ八

十餘歳にして卒す。門人私に安節先生と諡す。

張復

張復字は子遠。休寧地名の人なり。或家の僕なり。學を好まず。黄梅瞿九思と云人に從ひ。性命の奥を極め。黄州ゆく学を講じけるに。黄州の人挙て是を尊び。張夫子とぞ呼ける。ある時瞿九思寃を言ふ事あて。獄に入るに張復。徐孺子と共に京師に至り。鳳闕の下に上書す。其罪赦る。或游ふ。時の首輔張居正。張復が名を聞及び。其家に招き。物語し。仕官をすゝめ。こと云まけまぢそ。從はぢ。遂に古郷に歸る。再古主の家に僕と成て。茅屋を築き。自耕して母を養ひ居る。爨下語四巻。孝經本則一巻。小児語一巻を著す。さまざまの郷人。其有道なるを知る者あり。邑の令丁応

卷。其村に至りて。張夫子の居はいづくぞと。訪ける共知人あり。縉紳のある人をたのみて。なほせるに。漸ある者の云へる。某の僕久く。楚地名に居て帰りて後。又其主に仕ふる者あり。其者姓は張なり。りは此者なるか。張夫子と云人はいかゝとぞ答へける。其僕といふは則張復にぞ。縣令あるく縉紳と同く。其家に往て張復を拜し。山を繞て逃て避ける。令は空く其堂にて四拜して去る。郷人そなたよりも張復が道を抱き。義を好まず。然も賤き僕隷の身に安んじて居るを重んじて。下賤の人にも遇せざりける。張復は終に此地に終りぬ。今に至て黄州の臨坪鎮地名に張夫子の祠あり。

蘇門三賢

張果中字は子度。容城地名の人なり。少き時鹿善継と云人に從ひ学

びゝて。後左浮邱。魏郭園などゝ云賢者の官官禁裏の側女を云ふの〻ゝ難ふわひさ。都ゝ召〻〻問ハ〻〻時皆張が家をゞ宿ゆゞ〻〻ゝ〻〻。其後張ハ孫微ん君ゝ後ひと蘇門ゆ入て。遠く世を避け隠まゝ。此地ゆく終まゝ。夏峰村の村名北原ゆ葬ゝ。徵君其傳を作る。同時ゆ彭了凡と云人。蠡縣縣名の人ゝ。舊ゝ諸生学の人ゝ〻〻ゝ〻〻が。後河朔地名ゆ来て。徵君ゝ後ひと居ゝて。此土の人粟を與まゝを受けゞ。竟ゆ哺臺の名の傍ゝ死〻〻ゝて。徵君其墓ゆ餓夫墓と題〻〻ゝて。又理邑和字ハ寒石と云へるハ西華地名の人ゆく。本姓ハ李ゝ〻〻ゝど。鳳賊李自成と同姓なるを恥く。理と改ゝるゝ。詩文若干ゆり〻〻ゝども。亂を経く皆散失ぬ。徵君西華の左令が書を貽く。理が老母幼孫を恤ゝ振ハ〻ゝ。理を稱じく魯仲連古の賢者以後一人ゝと云ゝる。

劉以平

劉以平字ハ近塘と云人。猗氏地名の産ゝ。同邑の閔氏の女を聘〻〻く。未引取ざる其中ゆ女病出来ゝ。廢人ゝるゝ〻〻故已むるを得ざの竊ゝ次の女をゝ〻ゝ久遣ゝけ。合巹の夜以平女の病る容ゝを怪く。媒ゝ尋ゝれば有のまゝゆ語ゝ〻ゝ。以平悵〻〻るゝゆ思ゝく曰ゆ。吾聘せ〻ハ姉女ゝ病わゝとく棄るハ不義ゝ且嫁〻〻ゝざる事を悲みく。命のゝゞ〻〻ゝんとも量ゝがゞ〻〻。然ゝまゝゞゝ次女已ゆ我家ゝ来つるを。還ゝも道理なゝねゞ。是ハ弟以寛が妻ゝもべ〻〻。と曰く止め置き。更ゝ姉女を迎ゝ〻ゝ。姉ゝを果〻〻く嫁〻得ざるを悉ゝく。自害せんゝく居ゝて〻ゝるゝ。以平ゆ迎ゝ〻ゝまゝく。嬉く思ゝる故ゝ。病も程なく癒ゝく。兄弟同日ゝ婚礼をすゝ〻ゝける。後萬暦年号庚申の年ゆ。

華本繡像摸寫

張復遠く臨
坪鎮へ逃避と
身を安ず僕隷
とる事こ縣令の
恵を拒む

以平進士とあるりね。

韓增

項城の韓增と云人。戚氏の女を聘し。るゞ幾程もなくして其女盲目となりぬ。女の父母なゝふ。韓增少年まゝく文を能せず。定て行末常並の人ゝあらじ。然るゝ旨女を與へて。婦とせ。めんるゝ甚不可なり。所詮婚を辭し。女ハ生涯家ゝ終らせんと。なゝひ定め其由を。韓ゞ家ゝ言遣るべ。韓增ゞ父母ハ言おとせる如くゝせんと。なゝひけゝ共韓增聽ず。遂ゝ親迎し。るゞ。戚なゝるゝを得ずゝく美婢を擇て。勝女とゝく遣し。るゞ。韓增曰。美色をえて心動くハ人情。かゝる美女を止ゝて。夫婦の好を全くせざる端。とて。其婢を直ゝ還し。るゞ。後韓增。壬子の年。鄉選ゝ巻ゝ教諭の官（学校の役名）とあるゞ。婦を

携て。階ゝ行き。始終甚睦ゝし。るゞ。豫列の人其篤行を稱し。ゝく。宋の劉延式復此世ゝ見えゝりとぞ言けゝる。

張二

丐者張二と云者。何國の人と云ゝ定ゝるゞ。善水中ゝ入。又能一月も食ハぞしゝく居るゝを得ゝる。其上飛走甚捷ゝりけゝる。嘉靖年甲寅の年。日本の海賊の乱ゝ。太守の催ゝ応じゝく兵卒とゝるゞ。利器を持ゝく水ゝ入。敵の舟を底を鑿ゝく舟を沈め。或ゝ敵陣ゝ忍入ゝく首を取来ゝるゞ。太守銀牌を與へゝく。稿ゝ共受けず。酒を與れば則受ゝり。敵退ゝく後其功を論じゝく。百戶に賜ゝ。ゝ受ゝ當ゝるゞ。依ゝく郡縣ゝ。其相當の章服を授けゝども固辭し。ゝく受けず。舊の如く丐者とゝるゝく。獄廟の中ゝ臥し。平常少しも愁ゝる

色あり。其始如何なる人ぞ。あり。斯る大難を解免。大功を立て富貴を辞せ。昔の魯仲連が行事よく似る人なり。

亞盧

亞盧と云者、廣東増城縣の獄卒。性質朴なり。誠あり。萬暦年号戊午の歳の暮に囚人五十餘人聚て居る。亞盧何故ぞと問ひ。囚対て。新歳近づきぬ。邑の者共は父母妻子。聚て楽しく喜びいとなん。我等は此獄中に居る。還るを得ざる故に。悲みと云ふべし。亞盧首を傾け。暫思案して居るが。あと囚人等に向ひ云ふ。汝は安きを安とす。但汝等我が義理を忘るるなと云ふべし。囚皆怪て其故を問ふ。亞盧曰。我今両等が暇を与て還さん。正月二日に皆悉獄へ帰り来る。必約を違ふなかれ。我私に爾等を縱て其罪死を免れず。

此中一人なりとも来らざる者あらば我死罪に陥らんなり。況や悉く返らざるをや。然れども今日縱て爾等を置て。家に還さんとす。若我寿命尽て必死を免れず。畢竟如何して死するも同事なり。一つは快死するをあらん。死せんと云ふ。ことごとく悉縱して家に還しやる。明年正月三日。囚人皆悉帰て来る。籍を扣て名を呼ぶに一人も逃るなかりけり。亞盧掌を打て大に笑て。善哉と云。其中に妖坐して死なざる囚人皆哭して拜して其體を沐浴して漆をぬりて収めて此の縣令に送る。按御史に言て上げ朝廷へ達して。其縣の獄神とぞなる。今に至るまで祠に祭て禱れば必験あり。疾病疫癘の類禱れば必験あり。

ぜるるの。

趙遜

順治年号の初京都の趙遜と云者あり水を賣を業とし廿歳餘にして父母なし。妻もなくまづしく朋友共各助力しく婦を求しむ。入市中ゆく女一人を。銀二百両の買来り夫婦合巹をする時面の蒙巾を取去けきへ白髮の老母ゆく有り。趙遜興さめるるうゆひ直しく云ふ。吾少年を以て老嫗を婦とするはいかゝ。吾母とし〳〵事へん。勝るゆの世話をしく王ろ人〳〵と云ふまへ老嫗をとしく許容〳〵ぬ斯しく數日を経るゆ此嫗をあらふる。甚殷勤るし〳〵ゆ嫗感しく曰。汝朋友の助ゆ依く妻を求めんとく。不幸ゆく我を買ひ。財をも妻をも皆失へ。吾ゆ

ふらくえくる珠あり。髮をゆく再び妻を求むべし〳〵。帶の中ゆ縫込置。珠をゆし〳〵く與へ去べ。即銀二百目ゆ易得く。又市ゆ往く女を一人買来る。此女老嫗を一目ゆるるよりて。大ゆ哭しく故。遜怪く尋問へば即其嫗ゆ女なり。世の代りめの乱ゆ明亡びく今の清と成る時ゆ逢く。離散せし〳〵後各所〳〵ゆ流浪しく。久しく逢ごゆ〳〵。此家ゆく始く相見くるゆ。嫗ハ洪洞地名の人ゆく。舊死仕官の家ゆく。甚富く栄えく。男子二人有し〳〵。兵乱ゆく斯ちゆし〳〵ゆ成ゆく。今ゆ母子相聚ゆ去べ。故郷ゆ帰るべし〳〵とく。藏くる玉を取出しくるゆ。猶百餘顆ゆく。悉賣く路費とし〳〵。嫗并ゆ夫婦打連く家ゆ帰へし〳〵。二人の男子ハ出迎へく。思ひ掛なく大ゆ喜び。そはこゝの家財を二ゆ分ちく。二人の男子ゆ一つづゝ與へ。今一ハ趙遜夫婦ゆ與へけるとぞ。遜ハ貧人と成夫婦睦く

一生を過しゝるとあり。

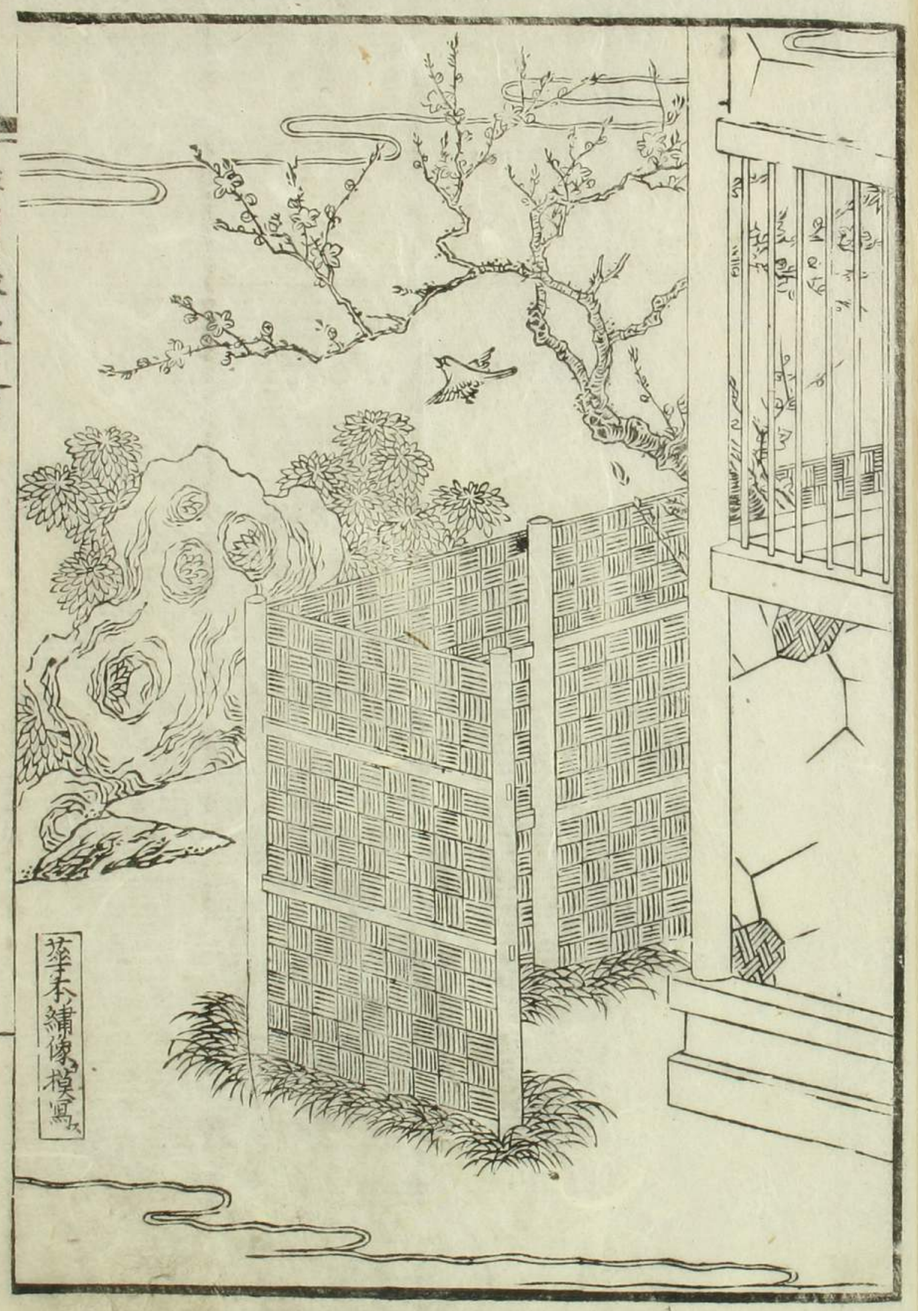
安成乞

吉州の安成地名に乞人あり。項の下に大なる瘤あり。其姓名を知る者なし。乞人ども生得施を好く。貧乏者には已ず人に乞ふる米銭を與へゝり。若恥て受ざる者あり。其殊に乏時を伺て米を其家に持往て預け置き。終に取に行ずして遂に其地に一人の婆婦あり。女なるまゝに木こるの能はず。彼乞人此を見て。夜薪を荷て其門口に置て帰り。終に人に語らざりゝ。其里の小路に横たせる橋ども。損し壊るゝるあるべ。此乞人土を荷ひ運びるゞ一人〳〵修復しゝる故郷人ヨヲく其義に感じゝり。此人一度物を乞厚くる家に。其年一度行事あり。常々人に云ふ。我先代は富豪なりしゝ金銭を人に貸て。利息を取るゝあるべ。過刻なりし故。其報我身に来りて。斯乞人となり。其上癭あるべく。身自由なるべと云ふ。賢乞人はまく曰。此乞人を貪らざる吝嗇。善を勉て倦まず。先代の為に罪をかどせず。且世の中に乞丐あるべ〳〵心の賤乏者共のあるべ。悔しめんとぞいひ侍る。

徐妙錦

明の中山武寧王名は徐達に四人の女あり。姉は燕王に嫁す。燕王帝位に即時皇后となる。則仁孝文皇后なり。次は代王に嫁しゝ妃となる。其次の女を妙錦と云美色なり。いまだ人に嫁せず。其妹を安王の妃とす。洪武の年号末に諸の藩国辞なるべ已に代王も獄に下る。妙錦熟世の形勢を感じゝ。誓を立て嫁せず。諸王ゝ婚を求る共皆拒て許さず。長姉

趙遂妻を
求めんとて
詐て二百両を
老媼に
買ふ


華木補像模写

仁孝文皇后崩ぜ〜後。文皇帝。妙錦が美色あやまつ然も賢なるを賞ぜ〜。聘〜く后とす〜王いんとす。内使女官を其家に遣〜く。其旨を諭さ〜む。妙錦病を言立て出ざ。女官其臥榻の下に往き視まゐ。妙錦衾を被て呻吟〜居る。女官假病なるんと察〜。叩頭〜く命を受王へと詰けまゐ。已むるを得ぎ〜く起上りて曰。吾貞容よくもわるぎ六宮の選に備へらるべ。非ず。と云ふを女官跪く。審に其顔色容貌視まゐ。清らに美事恰も天人の如し。急ぎ帰て有のまゝに奏〜けり。妙錦を再命のあらんるを恐まゐ。髮を剃て尼となる。天子此るの代ゆゑ重く別に皇后を立王いむ〜く。天子崩じ〜く後。又初の容に復〜ふ。宣德年号の初に張太后。妙錦の行ひ潔なるの代ゆゑ及王ひ女官を以て京に徵ま。道の程に中使に命〜て守護せ〜め。既に宮に入て太后に見え。自徐進ず第二の女と称〜て肅拜す。其形義端正〜く。一歩も違へるなし。太后以下皆尊敬〜王ひ。贈物多くあり。宮女共に各竊に語て曰。此人を〜命を辭〜ん。皇后にあらざ〜人なり〜。心を置まゐ。後正統年号中に身まかりけれ。鍾山名地なる家の墓所に葬る。始燕王の師京に至り〜時。建文帝明自焚死〜王に。妙錦を乞て曰。左の軍至る。帝を殿上に坐す。燕王を待王ひ。燕王に帝を〜〜く。自天子と称〜ん。万一左わん時に死〜王のとも遅かじ。何故遽く焚死〜王ひ〜やと云〜へ。誠に見識も高き。

萬義顔

義顒は鄞縣の萬氏の女なり。祖父八萬斌高帝に従ひて兵を起し指揮の官なり。北征北魏戦て〻討死す。其子萬鍾其職禄をつぐ。即義顒が父なり。ほこも遜国の難に死し〻なり。義顒が長兄萬武其跡を襲。兄も亦交趾地名にて死し〻たり。子なき故其弟萬文をけつぎて射龍将軍となる。海賊を禦て海中に死し〻なり。萬文が妻呉氏懐妊し居るが程なく男子を産めり。名を全と云。其時萬文が母と存生ふて。嫂陳氏に子なし。義顒盛年に至て名れむ。婚を求むる者多き為に。義顒家の漸に衰へゝるを見て嘆し〻く曰。吾家三代の間に四人まで国のために死し。皆骸骨を家に帰らず。今嫠婦三人家を支ふ。一人の孤を守立んとす。誠に祖宗の血脈なり。世七孤一人なり。我を捨るに忍びず。其上我若嫁せば家の為ゆへ一臂を失ふが如くなるべし〻と。悉く并さげ。家内も義顒を頼て居たり〻ぶ。強て嫁を勧めず。義顒日夜三人と力を戮せて。小児を撫育し家を治め。年月を経て全已に成童なり。顒もづから先祖以来の戰功并に国の為に死せし〻るの共を見るに如くに書はげ〻く全に與て己を勵し〻く先祖以来の志を承續へと教訓し〻る。後義顒を七十歳にして卒す。全其喪を勤るの母の如し。萬氏の子孫を是を祀る。射龍将軍と坐を列ね世に絶ざる家となり。

沈雲英

沈雲英は長巷里地名の沈氏の女なり。父至緒。崇禎年号四年。武科武藝の方の進士なり。雲英幼なよりて父に隨て。京に往来し〻て騎射を能す。

九歳より始て論語を讀て。ふと心付てのの有る侭学を受んとの志
請るゝ明年より四書又は孝経女誡を通す。其外唐詩宋詞の
類一度目を経れば。そのまゝ記憶して忘れず。そもそも塾師に従て。経
の難義者を受んと請ひ来れば。塾師まのあたり春秋胡氏傳を授る。明
朝の法式春秋より士を擇む。必胡氏傳を以て題とす。其内の傳題
と云るのみ。混雑して條理なきもの故に。強記の者朝夕此傳題を
研究窮むと雖共。十に五を忘失して故学ぶ者ヨヲく此を難とす。
然るに雲英は一度び指授を得れば。悉通暁して。老師宿儒ゆゑ苏ら
ばかり。崇禎十六年に父道別の守備に。要害の雲英父に隨て任に
往く時に流賊道別を侵して。父出て戰ひ。麻灘驛の名に賊を破る

其渠帥を陣前に斬る。賊を懼れて他列へ徙らんとせしに。其時大雨
ふりて然も至緒を。左體に創を被て居たれば。血流れて韡靷に。馬上
自由ならざるゆゑ。鐙を踏ずして馬より墜ぬ。賊の奇兵是を見て。競ひ
懸て至緒を殺す。其屍を掠去れり。雲英其時二十歳なりしが此を伐
と齊しく。甲冑して馬に跨り。十騎を帥て賊の陣に弛向ひ。賊の隊伍整
たざる所を。縱横に斬て廻る。三十餘人を討取て。終に父の屍を奪て還
る。賊大に驚て。再至緒が屍を奪はんとせし時。雲英を恵王。桂
王明の吉王の二人。永列へ走らしむと。賊等此三王を追懸んとせし。其
上雲英が驍勇なる所を。容易に克難しとゝ。忽其地を引取
れり。其時に王聚奎湖列の巡撫に。此由を奏して降勅を請け是則

至緒の昭武将軍の號を贈り。其祠を麻難驛の建る。一子を召し[illegible]
監国子監に入れり。雲英を游擊將軍とす。父の土卒を悉領せしむ。其時
雲英が夫賈萬策も荆州の南門を守り居るに。荆州も流賊の攻破
られて。萬策の節の死しぬる。雲英此由を聞て號呼して。吾命の絶こ
とと云て。哭して詔を辭し。父の柩を扶て家の帰る。其後清の師西陵
地名を渡りし時。雲英川の身を投死せんとしけるを母ならびに救て命
助りたれど。貧くして世を渡り難ければ。家祠の傍に塾を立て。一族
中の児共を訓ける。其族中の胡氏傳を習の者も。皆雲英を師とする。
順治十七年白洋海上の寇を観帰りて歎して曰。吾久しく此土の
居る事能へじと云て。塾中の児を皆家の返し。休浴して臥て。頃て
卒しけるとぞ。

賣腐人女

亳州の豆腐を賣を業として居る夫婦の者あり。本は北京の産なり
しが。仇を避て南方の来り。亳国名に住て。十年餘を歴て二百金を貯
けり。女子一人あり。年十五六の美色なりしかば同邑より聘せんと
者多し。女の父母計て曰。吾本北人なれば先祖の墳墓親戚皆北方の
あり。行て故郷の還らんとの思あり。然るの今此地の女を嫁せば往来甚
遠くして便あり。已の故郷を去て十年の餘を。仇も既に盡ぬべし。然れば
今女を具して故郷の還り。親しき家を擇て。女を嫁せんとの思ひ如何と云
ければ婦もまた同じ。頓て旅の装して。驢二匹雇ひて婦と女とを乗せ。父と

歩行して道を急ぎゐるが。二十里許も来たらんと思ふ比。馬に騎して弓刀を携へ。両人の者に行遇ふ。彼者共文の美貌なるを視て。強て女を抱て己が馬に撥上げ。策を加へて馳去る。夫婦の者の大に駭き。追懸て走れども。哀て女を云へ共賊許さず。夫婦の者の曰。吾五十金の貯あり。願くは其金ゆく女を贖へと云れども猶許さず。次第に金を多くして。終に二百金を出す。賊其金を取て女をも返すべしと云ども。夫復つれ去て悲む賊刀を抜て斬殺す。婦是を見て亦走て泣。泣歩ぶを是も同く殺す。又馬を馳て数十里を行が。道の傍に井ある所に。女伴て口唱けりと云ければ。賊共少女子恐るゝに足らじとて。馬より下し。扶水を汲んとて其器なし。女指さして。前の高樓の家に汲器あるべしと云けれ。実もそこに汲器を借に往が。女を今一人の賊の少し怠る所伺て。井の中に躍入る。賊周章居る處に。一人の賊已に汲器を借来る。此形勢を見て。急ぎ汲器縄に縋て井に入る。女を縛して上る賊頻て引上げ。縛を解て復縄を下して。井中の賊其縄を身に結付る時。上の賊身を屈めて力を出して引上んとす。女を捨ずして力に任せて。後より賊を突倒す。誤て井の中へ突墜す。もぐさの賊の馬に跨て。高樓の家に馳往く。有し事共を詳に語れば。村人皆女に隨ひ来て。井中を視れば果して二賊あり。引上視れば一人は頭を突折て死す。今一人を以て死せざる所。女賊の刀を抜て。忽其首を斬落す。扶賊の槖を捜して索めて。奪ふ所二百金其儘あり。村人女を伴て其列の守に詣る。女賊に逢て父母

賣腐人の女
謀を定めて
二賊を井中へ
殺し父母の
仇を報ず

の死せるを。其仇をむくいしに形勢共の始末を。詳に訴へけるに。守其金銀吟味し叔人を遣はしく。其父母の屍骸を尋ねさるる。女の言少しも違ひなりけるに。守大に奇と稱しく女に向て曰。汝父母に離れて。一人故郷に帰る共。何方へか身を寄すべき。吾幸に子なし。汝を吾子とし娶を擇て。汝を嫁せんと云ふいなと云ふに。女替首しく謝し。其言に隨ひける。守まづ女を署に迎へ入れ。兼て守の養し諸生の才あるいとこ女と迎ぎる。何某と云者を娶と定め。女の金を倍しく。粧奩としく嫁せしめけり。此事を傳へ聞者。女の奇節と守の盛德とに感じ多。康熙年中のなりとぞ。

益都人妾

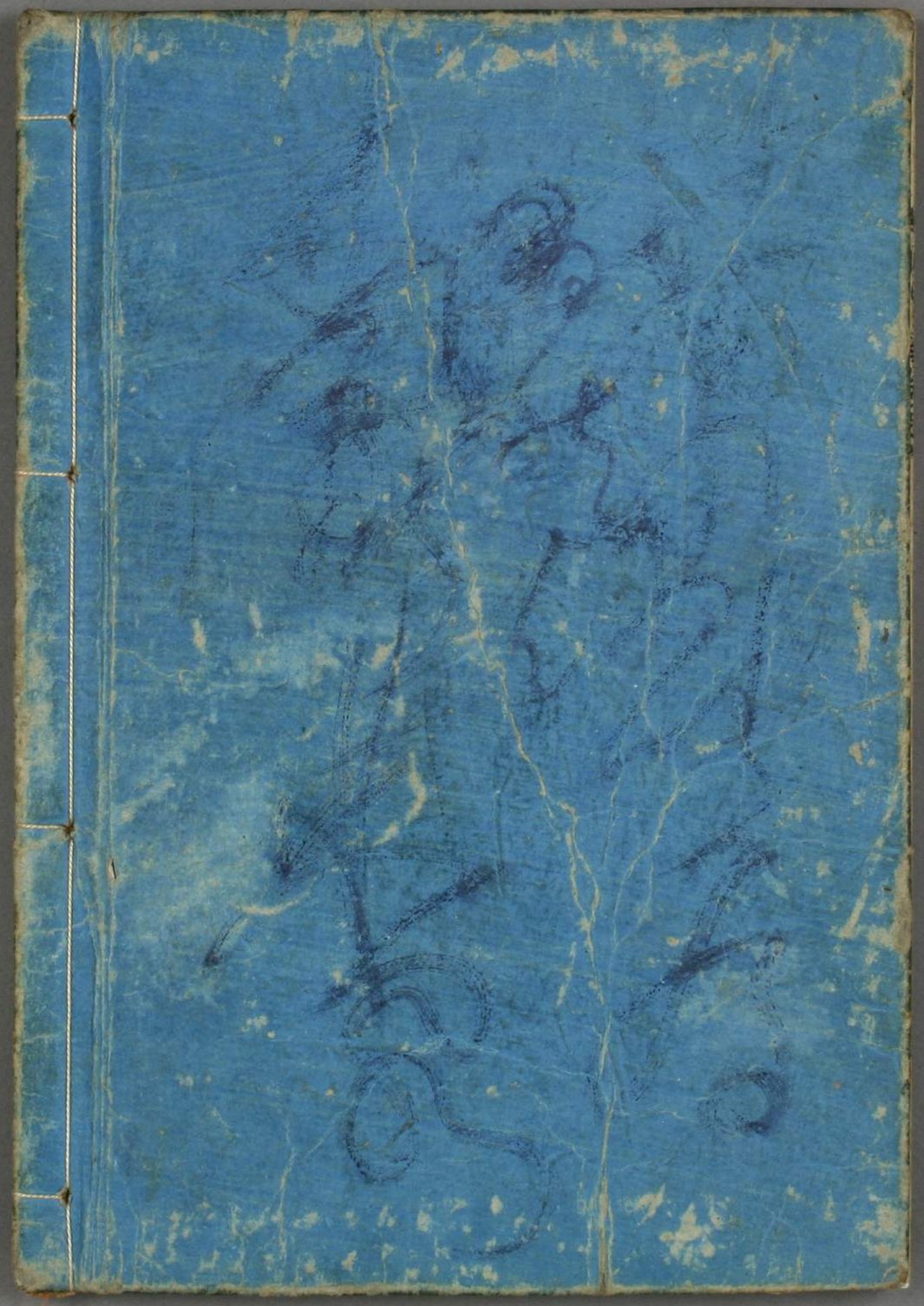
益都の西鄙地名に何某と云者。妾を加へ人多る共甚美なり。嫡妻嫉妒しく日々に笞を加へ。非道なりけれ共。妾少しも怨める氣色なしけり。或夜強盜十餘人其家に入る。夫婦の者怖れ戰て居たりしに。此妾暗き所より。杖一ツ提て出来り。真先に進む賊三四人を忽に擊踣す。自餘の賊恐れて皆遁奔る。妾声を励しく曰。鼠の如き奴原。吾杖を汚きに足らねど。あらくく命を預かるべし。重て来らば忽命を失なんとぞ罵る。賊去て後主。何とて斯をあえうと問る。其父の少林寺の武術を受け居たりしが。悉く女に傳へる故。此妾も百人の敵を有る。何故に妻非道に員をとりると問へば。妾答へ曰。是後を夫婦共に此妾をえ怪しめも。鄰里

の昔ゆえでも重んじ敬ひ奉るべし。

不孝を傷みてこれを書く

奇説排門録巻之六了

吉田屋

たるもいやしきもの家業
の性をそむくもの世を
いとはしかしふかの
業を卑しめ紙よ御宝楽を
ゆるしたまへ
後学のため

三国屋